

## 発刊にあたって

昭和50年9月、第28回日本胸部外科学会総会での理事会の席上のことである。曲直部会長より昭和52年度は第30回になるのでこれを記念して何か記念行事をしてはどうであろうという提案がなされた。その時は全理事了解したが具体的な検討はなかった。ついで同年12月、第29回会長、麻田教授のもとでの理事会のとき、私が副会長となったので第30回総会は私が開催する予定であることから、私に具体案を作ってはどうかということが実際にこの30年の歩みに取りかゝる端緒となった。

幸い宮本忍第17回会長のもとで、日大第2外科の陸川容亮先生が中心となり日本胸部外科学会17年の歩みを作られたものが大きな参考となった。(日胸外会誌、12：852—868，昭和39)

最近の我国の胸部外科は欧米に比して遜色はないと思っている。それよりも欧米より優れている分野も少なくない私は自負している。第二次大戦後の著しくおくれをとった我国の胸部外科がここまでの水準に達した事実の基盤を作られたのは多くの先輩の努力の賜である。終戦前後の先人の肺結核外科に注れた熱意と努力のあとを宮本、会田、加納、塩沢先生の記事から読みとることができるであろう。また日本胸部外科学会の創立当時の思い出、記録も当時の方々の記憶を呼び起すとともに、改めて若い胸部外科医にも胸部外科学会の成り立ちをよく知って貰うとともに先輩に続いて益々学会を盛り立てて行くための貴重な資料となりうるであろう。

現在日常茶飯事となっている肺機能の測定、心カテーテル、気管内麻酔、体外循環なども昭和24、25年頃は皆目見当がつかなかったものもある。しかしその頃よりこれらを含めて貪欲なほど新しい知識の吸収、諸種器具の試作、あるいは心外科のための多数の医師の米国への留学などと相まって我国の胸部外科は急速な進歩を遂げたのである。このような経過も各疾患別に原稿をいただいたので詳細を読みとれるのみならず、先人の努力のあとも伺い知ることができる。しかし過去あるいは現代の記録にのみ浸っているわけにもいかない。この日本胸部外科学会第30回を期して

我々胸部外科医の進むべき方向，あるいは将来の問題についてもふれていただいてあるので，これらを読まれるときは単に諸先生のお考えに同調するのみでなく，自ら考えを廻らし新しい我国の胸部外科の道を開拓することも必要である．これによってこの日本胸部外科学会30年の歩みが単なる記念のための小冊子でなく，将来の我々の指針の一助となることを希望する．

本来ならば多くの先生がたから原稿をいただくべきであったが，誌面の都合上限定せざるをえなかったことを理事会および編集委員会を代表してお詫びする．

第30回日本胸部外科学会会長 早 田 義 博